研究所だより

編集・発行
千葉県長生地方教育研究所
茂原市東郷2300－1
TEL 0475(24)9721・FAX 0475(23)4820
ＨＰ　http://www.choseikaikan.or.jp/
メール　kenkyujo@beach.ocn.ne.jp

「コミュニティ・スクール（地域とともにある学校）に期待するもの」

睦沢町長　市　原　　武

【コミュニティ・スクール導入の経緯】

私が，コミュニティ・スクールという言葉を改めて意識し始めたのは，総合教育会議において，教育委員会と意見交換を行うなかでのことでした。それは，少子高齢化により現在の町内２小学校（土睦小・瑞沢小）を適正規模の学校に再編することが決定し，新しい学校の在り方を協議する再編準備協議会からの報告により，コミュニティ・スクール導入の提案を受けたからです。

現在は，睦沢町コミュニティ・スクール推進委員会が立ち上がり，４月に開校する睦沢小学校コミュニティ・スクール発足に向けた準備が進められております。

コミュニティ・スクールはその呼び名をわかりやすく「地域とともにある学校」とも呼ばれておりますが，その立上げの提案を行った再編準備協議会や導入の準備を進めるコミュニティ・スクール推進委員会の構成が，保護者や地域住民，ボランティア，学校現場職員の代表など，子どもたちと関わりのある方々の熱心な協議により進められてきたことに，私は大きな喜びと期待を感じております。

【今，なぜコミュニティ・スクールが必要か】

現在の子どもたちを取り巻く教育環境や社会の動向は，ＩＣＴ・情報化，グローバル化の進展，少子高齢化，核家族化などによる地域社会のつながりの希薄化があり，地域によっては貧困問題や児童虐待，いじめや暴力などの問題も深刻化しています。

また，学校現場においても複雑，多様化した課題に伴う教職員の多忙化がクローズアップされております。

これら子どもや学校の抱える課題を解決したり，未来を担う子どもたちの豊かな成長を促進したりするためには，社会総がかりで行う教育を実現することが不可欠であり，それを実現するためのツールがコミュニティ・スクールであると言われております。

また，コミュニティ・スクールの具体的なメリットをそれぞれの立場から捉えますと次のように分析されております。

子どもたちにとっては，学びや体験活動が充実し，地域への貢献活動などを通し地域の担い手としての自覚が高まります。また，多様な活動を通して自己肯定感や他人を思いやる気持ちが高まります。

この他，交通・防犯の支援により，安心して学校や地域での生活を送ることができます。

教職員にとっては，今まで以上に地域の人々の理解や協力を得た学校運営を実現することができます。また，地域の人材を活用した教育も充実します。

そして，地域の方々の支援・協力によって「子どもと向き合う時間の確保」ができます。

保護者にとっては，「地域の中で子どもたちが育てられている」という安心感を得ることができます。そのことから，保護者同士や地域の人々との人間関係が構築されていきます。また，これまで以上に学校や地域に対する理解が深まります。

地域の人々にとっては，知識・経験・技能などを生かせるので，生き甲斐や自己有用感につながります。また，それらの活動を学校を中心に組織的・計画的に行うことで，地域ネットワークが形成されると共に学校が地域づくりの拠点となります。さらにそれらは地域の防犯・防災体制等の構築にもつながります。

このように，コミュニティ・スクールは，地域の持っている様々な力（教育力）を学校に取り込み，子どもたちに人間力や社会力などを高めるだけでなく，世代を問わず生涯学習の推進につながると共に地域の活性化も期待できる要素を十分に備えているのです。

本町においては，現在の２つの小学校区においては，それぞれの学区で，学校と地域は密接につながり，これまでも地域の方々が学校行事等に積極的に関わってくださり，大きな支援をいただいておりました。４月からは再編により１つの小学校区となることから，町民全体で新しい学校のビジョンを共有し，一体となって子どもたちを育む必要があります。その為にも「地域とともにある学校」に転換をする最も有効な機会であると捉えております。

【睦沢小学校のコミュニティ・スクールの姿　合言葉　～ともに学ぼう～】

これまでの，再編準備協議会やコミュニティ・スクール推進委員会の委員の皆様など関係各位のご努力により，睦沢小学校のコミュニティ・スクールの姿がようやく見えてきました。

地域とともにある学校として十分に機能させるために学校運営に欠かせない３つの大きな柱がございます。その１点目は「熟議」です。各種課題解決に向けて，熟慮と討議を重ねながら対話をする熟議が必要です。２点目は「協働」です。地域の人々が共通の目標に向け，当事者意識を持ち「協働」して活動しなければなりません。そして３点目は「マネジメント」です。学校は地域との関係を構築し，地域人材や資源等を生かした学校運営の実現に取り組まなければなりません。

今後は，睦沢町学校運営協議会の設置及び運営に関する規則に基づき，運営を行う訳ですが，本町においては学校運営協議会と学校支援地域本部の連携・協働が重要であると考え，両方を対等に位置づけ，つなぎ役として地域コーディネーターを配置する構成にしております。幸い，平成２６年から学校を支援する体制として学校支援地域本部が立ち上がっておりますので，この体制を更に発展させ，学校が地域に求める支援内容をまとめた上で，学校支援ボランティアが効果的に活動できるよう組織の中に「まなび隊」「行事隊」「安全隊」「環境隊」の４つの専門部会を設けました。

更に，地域が一つになって取り組むため，合言葉「ともに学ぼう」を掲げ「できる人が，できる時に，できる事から」をモットーに周知を図る予定です。そして，将来的には中学校へと拡大し，学校を核として，人と人とがつながる地域づくり，まちづくりに発展するものと期待しております。

「千葉県の家庭教育支援の取組について」

千葉県教育庁教育振興部生涯学習課
学校・家庭・地域連携室　主査　石　川　哲　也

1　家庭教育の現状について

家庭教育は，すべての教育の出発点です。

家族のふれ合いは，子どもが，基本的な生活習慣や生活能力，人に対する信頼感，豊かな情操，他人に対する思いやり，基本的倫理観，自尊心や自立心，社会的なマナーなどを身に付けていく上で重要な役割を果たしています。

いつも家族で「おはよう」「ただいま」「おやすみ」などのあいさつを習慣にしている，早寝・早起きを心がけている，学校での出来事などについて子どもとよく話をするなど・・・。家庭は，子どもたちが最も身近に接する社会であり，子どもの心のよりどころとなるものです。

また，子どもは家庭の中だけで育つわけではありません。学校や地域の様々な人たちと関わり，見守られながら成長していきます。

かつては，親以外にも多くの大人が子どもに接することで，地域において子育てや家庭教育を支えるしくみや環境がありました。しかし，昨今では都市化や核家族化，少子化，雇用環境の変化などにより，親や家庭を取り巻く状況，子育てを支える環境も大きく変化しています。家庭の多忙化や，孤立化で時間的・精神的ゆとりを持てない状況がみられる中，児童虐待など，家庭をめぐる問題も深刻化してきています。

こうした状況は，決して個々の家庭だけの問題ではありません。保護者の皆さんが安心して子育てや家庭教育ができるよう，社会全体で家庭教育の大切さを考え，支援していくことが大切になってきています。

今，学校や地域社会，行政，企業等が力を合わせ，子育て家庭の「支え」となり，社会全体で子育てや家庭教育を応援していくことが求められます。

2　千葉県における家庭教育支援について

千葉県教育委員会では，家庭教育の支援について千葉県教育振興基本計画に位置づけています。すべての家庭の教育力向上とその充実を図るため，千葉県家庭教育推進委員会において，本県の実情に応じた家庭教育支援の方策等を協議し，総合的な企画・立案を行い，様々な事業を実施しています。

その中でも，学校にも関わりの深い４つの事業について，御紹介いたします。

（1）「学校から発信する家庭教育支援プログラム」普及啓発事業

自主的な学習機会への参加が難しい家庭や子どもの教育に関心の低い家庭，子育てに悩む家庭等，すべての家庭の教育力向上を図るため，「学校から発信する家庭教育支援プログラム」普及啓発事業を推進しています。

しつけ（幼児版），家庭学習について（小学生版），スマートフォンの使用（中学生版）等の様々な資料があります。PDF及びWord版を，HP上で提供しています。学級懇談会の資料としてそのまま活用いただいたり，学年だよりのコラムとして，一部を抜粋して使用いただいたりすることができます。先生方の業務改善の一助にもなると思います。

【学校から発信する
家庭教育支援プログラムHP→】

（2）「親力アップいきいき子育て広場」事業

家庭教育に関する知識や手立てを気軽に学べるウェブサイトです。乳幼児期から中学生までの大切な成長期の子育てを支援するため，より良い子どもの生活習慣や学習習慣の定着等，家庭で直面する問題への知識と手立てについて提案しています。

教育相談等で，家庭教育に関して保護者から相談があった場合など，御紹介いただければと思います。

【親力アップいきいき子育て広場HP→】

（3）家庭教育リーフレット

家庭の教育力の向上を支援するため，幼児版・小学生版・小学4年生版・中学生版の4種類のリーフレットを作成しており，入学時，進級時等に配付しています。

基本的な生活習慣と決まり，親子のコミュニケーション，家庭学習・読書の習慣等の向上に向けて，親子で話し合いながら活用できるようチェックリスト形式で掲載しています。

HPからダウンロードできますので，学級懇談会等の資料としても御活用ください。

【家庭教育リーフレットHP→】

（4）ちば家庭・学校・地域応援企業等登録制度

企業の持つ技術やノウハウは貴重な教育的資源であることから，教育CSR（教育分野に対する貢献活動）に取り組む企業を，HP上で広く県民の皆様に周知する「ちば家庭・学校・地域応援企業等登録制度」に取り組んでいます。

現在，多くの登録企業が，子育てに関わる休暇取得の促進や，家庭教育に係る研修の実施等，家庭教育支援に取り組み，家庭・学校・地域が一体となって子どもを育てる環境作りにも協力をいただいています。

登録企業の中には，職場体験の受け入れ，出前授業の実施を行っている企業も多数含まれていますので，ぜひ御覧ください。

3　学校・家庭・地域の連携について

家庭教育の支援は，学校・家庭・地域それぞれが，目標を共有しながら，相互に連携・協働し，子どもの発達にとって必要な取組を工夫して行っていくことが大切になります。

例えば，子どものコミュニケーション能力の育成のためには，家庭においては，親子の会話を通じて言語力を育み，学校においては，学級活動や学校行事等を通じて他者との人間関係構築能力を育み，地域においては，あいさつ活動や地域活動において子どもへの役割を付与し社会性を育むことなどが期待されます。

学校・家庭・地域が継続的に連携して，家庭教育を支援することが，子どもの健全な育成につながります。

千葉県教育委員会生涯学習課では，学校・家庭・地域の連携を推進していきます。

特にお勧めしたい事業については，QRコードを記載しました。業務改善にも役立ちますので，ぜひ御覧ください。

～療育を通した本人支援と家庭支援～

一般社団法人　こども未来共生会　理事長　中　島　　展

昔ながらの持ちつ持たれつの世界，できないところは援助を受け，できるところは責任を果たして生活していくという「インクルージョン」の考え方がありますが，それは，特別な考え方ではなく，「共生社会」実現のための一般的な考え方です。子どもたちが笑顔で豊かに暮らしていくためには，この考え方に乗っ取った教育や療育，そして子どもたちが生活していく家庭を支援していく必要があります。

私たち未来共生会は，児童福祉法おける様々な事業を行っています。平成２４年１１月から，夷隅郡市では初の「こども発達支援センターそらいろ」の運営を開始いたしました。対象の地域は，夷隅・長生・安房を中心に，広域的な運営をしてきました。平成３０年１月現在５８０人を超える子どもたちに利用していただいています。センターは児童福祉法に基づく未就学児への「児童発達支援事業」，学齢児に向けては「放課後等デイサービス」の事業，千葉県の指定を受け，「千葉県障害児等療育支援事業」に基づく個別療育やグループ療育，保育園・学校や施設等の指導・支援を行っています。また，専門職によるSSTやこころとことばの個別療育も行っています。すべての療育支援は，発達支援の必要な子どもたちが，できにくいところやできないところを適切な療育を受けて，地域の人や資源などと共に，他の人と同じように楽しく充実した地域生活を実現していく事が必要という考え方に基づいています。

学校はインクルーシブな教育の場を提供，施設や事業者はインクルーシブな暮らしの場を提供しますが，今までは家庭生活支援を含めて，教育・療育・福祉・医療，それぞれが独立した世界のなかで支援について考えられてきました。その原因の一つには，それぞれを繋ぎコーディネートしていく機関がなかった事やそれぞれの役割を十分に理解しあっていなかった点があります。

こども発達支援センターそらいろの「療育支援」には，本人支援以外に，このコーディネート機能を円滑に進めていく潤滑油のような役割も期待されており，児童福祉法の「保育所等訪問支援事業」や千葉県の「千葉県障害児等療育相談事業」を通じて地域の機関と本人理解を進めています。地域の発達センターとしての役割は限定的では意味がなく，プライマリーケアとして身近な相談や支援が気軽に，迅速に行われるべきという考え方で進めていきます。

人は心身共に豊かで健康であるべきです。まずは，親にとっての「我が子」，教員にとっても「我が受け持ちの子」，私たちにおいては「わが担当の子」であり，ひとりひとりです。その点は「人としての尊厳」の立場からもっともっと強調され，生活の質を考えていくために共有されるべきです。私たちがこの一人のために「何をすべきか，何ができるか」を地域資源の連携の中で考えていき，家族を含めた「生きづらさ」の克服にきちんと向き合い，どうしたら「豊かで幸せな」生活ができるかを考える事が大事であり，それを療育支援によって効果をあげていかなければなりません。

子どもたちや親は，地域生活においても例外なく困り感をもっています。地域生活における支援のスタートラインは障がいそのものだけに向き合う事ではなく，その子の暮らしの中で抱える「今の生きづらさ」に向き合うことだと考えます。この「今の生きづらさ」の中に，「障がいへの特別な配慮」や「家庭環境の調整」，「地域の環境」…など様々な背景がある事に気づき，その人の暮らしに応じた個別の支援の形が生まれます。我々への期待はまさにこの点への支援であると思っています。

療育支援は，本人を支援してくことは当然ですが，家庭の困り感へも支援を行い，家庭において十分に力を発揮してもらうことも大きな目標です。働く親御さんの時間的な支援だけでなく，本人のスキル向上によって家庭生活の困難性を軽減していき，生活そのものを支えていくものでもあります。実際に家庭の困り感を把握して，家庭を含めて地域機関と協働して療育支援を行い，糸を繋いだことで子どもの行動が落ち着き，家庭が落ち着き療育が終結になった事例があります。

このような療育支援を考えたときに，我々の事業所だけでは何もできる事はありません。関係する機関が知識や技術を持ち，家庭が気軽に地域資源を活用できるネットワークが備わらなければ，折角の良い個別支援計画も効果をあげることはありません。地域で生きる子どもたちを支えるという事は，この力をそれぞれが駆使しながら，連携の中で自身にできない事を補い合いその子どもの「幸せな暮らし」への体制を整えていくことです。

「豊かな暮らしのために」我々のような事業を十分に使って，親や子どもに関わるすべての人が自信を持って取り組む意識と地域との連携を通した活動し易い環境を作り，効果的に進められるようにしていく事が必要だと思います。療育支援を受けるという事は，将来にわたって豊かな生活を送るために何があれば効果的なのか，また何が妨げる要因になっているのかを上手に整理して，積極的に先進かつ効果的な支援の方法を探ることにつながります。それを効果的に進めていけるかは，私たち事業者がインクルーシブな考え方を持ち，内外のコンサルテーション機能を高め地域との「点」での関わりを「線」に，そして「円」にしていく役割を果たせるかだと考えます。私たちは常に教育と療育，医療との協同支援を意識しています。

「長生教育の発展を願って」
これからの道徳教育について

長生教育研究会　会長　大　場　英　昭

１　はじめに

新学習指導要領の完全実施に向けて，今教育界は大きな変革期にあります。とくに「道徳教育」に関しては，教科化や評価の問題で，これからの指導のあり方，授業の進め方が問われるのは必至です。微力ながら，自分は長生教育研究会や千葉県道徳研究会で，１０年以上にわたり部長や支会長を務めてきました。その経験から，「これからの道徳教育」について，自分なりの考えを述べたいと思います。

２　なぜ，道徳の教科化が進められたか？

一つのきっかけとなったのは，２０１１年９月滋賀県大津市における「中学生のいじめ事件」です。集団によるいじめにより，一人の尊い中学生の命が失われました。さらに，その時の学校や教育委員会の対応が，問題視されました。

また道徳指導面での学校格差，個々の教員の意識や研究心の格差が，それに拍車をかけました。加えて，道徳全体の質的な向上，指導内容の統一性の必要性が問われてきました。

３　これからの道徳教育が目指すもの

○　考える道徳，議論する道徳

以前から，葛藤教材やそれぞれの発達段階と実態を考慮した資料等を使って，多様な価値観を引き出す授業は実践されてきたと思います。大切なのは，児童生徒達が自分の考えと照らし合わせ，活発に話し合う場面づくりをすることです。特に今までと違ったことを始めようと，意識しすぎないことです。

○　道徳性を養う

「道徳的実践力」は今までよく使われた言葉です。道徳的心情，判断力，実践意欲，態度などの道徳的諸価値を総括したものとして使われていました。しかし今回の改訂においては，それに代わり，人としてより良く生きるための基盤となる「道徳性」という総合的な文言が示されています。４つの諸価値を重視しながら，広い視野にたち，全体的に道徳を指導していこうという姿勢が，今後必要だと考えます。

○　自己を見つめる

「自己を見つめる」とは，自分を客観的に見ることです。発達段階において「今までの自分の生き方」を見つめ，自己の存在価値を認識し，肯定感を高めながら，自己実現を可能にすることです。ここに，道徳教育の大きなねらいがあります。

４　忘れて欲しくないこと

○　不易と流行

いつの時代も，忘れてはならないことがあります。道徳教育においては，「より良く生きようとする自己の姿を，常に追求すること」が大切です。新しい指導方法を取り入れながらも，このことを決して忘れないようにして欲しいものです。

○　長期スパンで考える

短期間，例えば１時間の授業で，児童生徒の変容を早急に見ようとしたり，指導したのになぜ何も変わらないのか？という気持ちを持つことは控えましょう。例え教師でも，そんなに早く人の心は変えられません。すぐそれを期待しないことです。決してあせらず，広い心を持ち，じっくりと指導にあたって欲しいものです。

５　道徳授業の進め方について

○　指導観をしっかりと

今盛んに言われている「多面的，多角的な見方」を，授業中に児童生徒から引き出すのは大切ですが，指導観がふらつくと，授業全体が違った方向に進みます。場面に応じて時には軌道修正をし，ねらいとする価値に向かって，授業を組み立てて下さい。

○　導入の大切さ

「今日は，『友情の大切さ』」を皆で考えましょう」この一言から始まる授業を見ました。これは学級活動？，価値の押しつけ？，強い違和感を感じました。

○　あなただったら？という発問

せっかく児童が，登場人物と自分を重ね合わせて資料を読み取っている時，「あなただったら？」という発問で，急に現実に戻される時があります。案の定「自分には無理です」という意見が出ました。自分に戻す発問はまだ早いと感じた場面でした。

○　活発な授業？

ある小学校低学年の授業では，発言が非常に多く元気に児童が学習していました。でもよく見ると，何人かの発言で授業が進み，何人かは手いたずらを。時には挙手なしの意図的指名や，沈黙の中でみんなでじっくり考える場面があっても良いと思います。

○　机間指導の重要性

机間指導は，何のために行うのか？。授業のうまい先生は，周りながら瞬時に児童生徒のノートの記述内容をチェックし，意見葛藤をさせたりします。担任と児童生徒の間で，すぐチェックできる「約束マーク」の活用も，一つの有効な手段だと考えます。

○　役割演技で

演技や会話が非常にうまい子が，張り切って演じる姿は微笑ましいものです。でも大切なのは演技の上手下手ではありません。ある授業で，登場人物の悔しい様子について，表情のみで，無言で演じた児童がいました。とてもすばらしいと思いました。

６　道徳の評価

○　道徳の評価とは？

道徳教育の評価とは，学校の教育課程内における評価であり，道徳科の評価とは，児童の学習状況，道徳性の様子の評価です。その区別をしっかりと。

○　なぜ評価が必要？

児童にとっては，自分の成長を振り返る契機となり，教師にとっては指導計画や指導方法を改善する手がかりとなるものです。そのため評価は必要です。

○　良さを見つけ，肯定的に評価する

大切なのは，児童生徒の良さを見つめ，今後の成長を願い，その子に応じた評価を肯定的に進めることです。心の評価です。行動の評定とは違います。

○　評価の方法・進め方

様々な評価方法がありますが，教師自身がその都度，道徳ノートや，ポートフォリオ等の記録を残し，客観的な資料を積み重ねていくことが大切です。その進め方については，担任の個性を生かして下さい。

７　終わりに

これからの道徳教育は，学校の独自性が問われます。管理職や道徳教育推進教師が中心となり，「時代に即した道徳教育の推進」を心から期待します。

平成29年度千葉県長期研修生　研究報告

中学校体育授業におけるベースボール型の系統的指導プログラムに関する研究
－１年生と２年生の接続を視野に入れて－

茂原市立南中学校
教諭　本吉　　篤

Ⅰ　研究主題について

本研究は，球技「ベースボール型」の単元を通して，以下に焦点をあてて主題を設定した。

（１）系統性を踏まえて計画した簡易なゲームを，授業実践を通して検証していく。

（２）中学校３年生での選択制を見据え，第１学年及び第２学年で基本的な知識や運動の技能を学習し，特性や魅力に触れる。

本研究を通して，運動を豊かに実践することができるようにすることを目指す。

Ⅱ　研究目標

中学校のベースボール型の系統的指導プログラムを開発し，実践を通して有効性を明らかにする。

Ⅲ　授業の概要（第1･2学年　各8時間扱い）

（１）学習課題に応じたメインゲームの設定を系統的に配置した教材について

１年生は３段階のメインゲームを行った。ゲーム１では，いかに早くボールを本塁に返すことができるかが課題。ゲーム２では，打球や打者の動きを予測し，３つのアウトゾーンのどこでアウトをとるのか判断できるかが課題。ゲーム３では，どちらをどこでアウトをとるのか判断できるかが課題。アウトにする対象者が２人になったことで迷いが生じ，チームの意思決定がさらに問われる学習である。本研究では，1年生のまとめのゲームとした。

２年生は２段階のメインゲームを行った。ゲーム４では，アウトゾーンが３つから４つに増えた場で，ゲーム３のように適切な判断ができるかが課題。ゲーム５では，打球に応じた走者の判断と，それを阻止する守備の判断が課題となる。

（２）知識・技能について

限られた時間の中で特性を楽しむためには，メインゲームの時間を削減することはできない。できるだけ短時間で繰り返し練習できる教具の開発と，その操作のための知識を合わせて指導していき，あとはゲームの中で実践しながら技能の向上を図った。実際のゲームを想定し，打球や走者に対する守備の判断を問う知識テストもあわせて実施した。

（３）検証と結果

①GPAIなど様々な分析・検証の結果から，本研究の系統的指導プログラムが有効であり，ベースボール型における「知識・技能」が身についた。

②形成的授業評価(自由記述を含む)から，ベースボール型の楽しさを味わうことができた。

授業後に９割以上の生徒が「面白かった」と答えていたことから，本研究が生徒にとって面白かったと感じる系統的指導であったことが言える。

主体的・対話的で深い学びの実現を目指す物語教材の学習
－思考を促す発問を通して読む力を高める学習指導について－

茂原市立東郷小学校
教諭　松浦　俊介

Ⅰ　研究主題について

本研究では，児童にとって身近な教科書物語教材を通して，文章を読み解き，物語の世界観を豊かに味わっていく力を育むことをねらいとした。そのためには，児童が課題意識をしっかりともち，自ら進んで文章を繰り返し読み(主体的)，児童間で協働しながら(対話的)，自身の読みを確かめ，整理し，考えを広げ深める(深い学び)ことができるような授業の構築が大切である。

今回の研究では，その中でも，児童自身の読みを深め，物語の世界に浸っていくことのきっかけとなる発問の在り方に注目した。発問で課題を明確にすることで，児童は自ら進んで教材を読み進め，ときには友達と協働的に活動しながら，思考を深めていくことができると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

児童の思考を促し，読む力を高めるための国語科授業での適切な発問の在り方を明らかにする。

Ⅲ　授業の概要(第４学年及び第５学年)

(１)第４学年「一つの花」(９時間扱い)

戦争というテーマが重く，児童の初発の感想の多くは戦争の悲惨さ，両親の無念さなどに注目したものとなる。しかし，読み深めていくと，「一つの花」に込められた父の思い，「一つだけ」という言葉に込められた父母の思いに気付くことができる。終戦から10年が経った最後の場面では，児童と同年代となったゆみ子に思いを重ね，生き方について考えるきっかけも与えてくれる。このように，児童任せの読みだけではたどり着けない物語の深みがこの作品にはある。発問を通して叙述に目を向けさせること，繰り返し何度も読み返したくなるように仕向けることで児童は自身の力で，あるいは協力して読み深めていける。

(２)第５学年「わらぐつの中の神様」(８時間扱い)

児童にとっては，同年代の女の子として描かれているマサエに自分を重ね，共感しながら読み進めていくことのできる教材である。登場人物の誠実さや心の通い合い，ものの真の価値を通して，児童一人一人も自分自身のものの見方や考え方，生き方までを深く考えることのできる教材である。初発の感想では，現在―過去―現在の額縁構造についてのものが多く，「意外だった」，「びっくりした」という感想であった。ここからさらに人物相互の関係や登場人物の心情に迫る読みをすることで，より物語の面白さを味わうことができる。

以上のように，発問によって場面の様子を鮮明にしたり，叙述や友達の読みを基にイメージを広げたりすることで，読みに深まりが生まれ，物語文により一層親しむことができた。

各種研修を終えて

初任者研修を振り返って

茂原市立豊岡小学校
養護教諭　土屋　晴香

本校に着任してからもうすぐ１年が経つ。本当に何も分からないところから始まり，見通しが持てず，失敗することや迷惑をかけることも多かったが，たくさんの方に助けていただきながら，一つひとつ乗り越えてくることができた。周りの方々に支えられ，温かいご指導をいただきながら多くのことを学んだ１年だった。

校外研修では，各分野の専門的な講師の方や現職の養護教諭の方に来ていただき，貴重なお話をたくさん聞くことができた。今まで曖昧でよく理解していなかったことも，講師の方がわかりやすく教えてくださったので，大変勉強になった。

特に，自己研修課題研究への取り組みは印象に残った。本校の課題から研究の主題設定をし，内容や方法，手立てを考え，実践したことをグループに分かれて協議した。少数で，講師の方も交えての協議だったので，一人ひとりに細かくご指導いただき，今後の実践に役立つ情報をたくさん知り得ることができた。日々の保健業務をおこなっていく中で，課題意識をもっていても，改善するための手立て等を計画し，行動に移すというのは難しい場合もあるが，このような機会をいただき，学校の実態を把握した上で児童が学校生活をより安心安全に過ごすための手立てを考え，実践することができてよかった。

また，校外研修を通してたくさんの同期の仲間と一緒に学び合えたことが，大きな支えとなった。

校内研修では，初任者指導養護教員の清澤恵子先生に多くのことを教えていただいた。限られた時間ではあったが，専門的な話をたくさん聞くことができて，とても充実した研修となった。普段は一人職であるため，悩むことや疑問に思うことがあってもなかなかすぐには解決できないが，清澤先生がたくさんの知識や経験をもとに様々なことを教えてくださり大変勉強になった。

毎日が緊張の連続で，気持ちも落ち込む中，清澤先生が来てくださる日は安心して職務にあたることができた。失敗ばかりの私に，包み込むような優しさで接してくださり，悩んでいることは話を聞くだけでなく，一緒に解決策を考えてくださった。素敵な先生に出会えたことを嬉しく思うと同時に，私も清澤先生のような養護教諭になりたいと思った。

良い環境で研修をさせていただいたことに感謝し，学んだことを子どもたちのために活かしていきたい。

フォローアップ研修Ⅱを終えて

長南町立長南中学校
教諭　江澤　良樹

教員となり３年目を迎えました。今年度は３年生の担任となり，高校入試という責任の重さを感じながらも，充実した日々を送ることができました。また，研修を通して，私自身この３年間で教員として成長することができたと思っています。

フォローアップ研修Ⅰ・Ⅱでは，普段，勤務校だけでは学べないことをこの機会に試みようと，さまざまな研修を組みました。特に，校外の先生方の優れた授業実践を見学したことが印象に残っています。生徒が真剣に授業に向かう姿勢や，生き生きと学び合いをする様子を拝見させていただき，自分の授業を見直すきっかけとなりました。また，異校種体験では，小学校で授業を行うという貴重な体験をさせていただきました。自分の意見を発表しようと，積極的に手を挙げる児童の姿に，ただただ感動しました。この経験から，興味を惹く発問，教具の工夫など，「分かる授業」をするためにはどうしたらよいのか，その糸口を見つけることができました。その他にも，「指導力アップセミナー」を受講し，ワークショップ形式のグループワークトレーニングの方法を学び，学級で意見をまとめるときなどに，非常に助かりました。

勤務校においても，校長先生をはじめ，教科指導員の先生からご指導をいただきました。生徒の関心から学習問題を設定することなど，授業の基礎から学び直しました。３年目になり，新たに課題が見つかることも多く，「教師は授業で勝負する」という気持ちを改めて感じているところです。

また，同期の先生方との「ともに学ぶ研修」では，学級経営，生徒指導など，各校での実践を発表し合いました。日々の教育実践で苦労していることなど，気兼ねなく話すことができ，講師の先生にご指導をいただきながら協議をすることができました。今後も同期の先生方と切磋琢磨しながら，学び続ける姿勢を大切にしたいと思います。

今，改めてこの１年間を振り返ると，授業だけでなく，学級経営，生徒指導等の研修も，教師力アップ研修として自分の課題に合わせて選ぶことができるので，とても有意義な研修になったと感じています。

初任者研修から始まり，フォローアップ研修Ⅰ・Ⅱと，３年間で内容の濃い研修を受けることができました。この研修で学んだことを今後の糧として，教員として日々成長していきたいと思います。

各種研修を終えて

５年経験者研修を終えて

長生村立高根小学校
教諭　渡邉　純一

教員生活も６年目を迎えました。初任者だった頃と比べ，日々の学習指導に見通しをもって，学校生活を送れるようになってきました。また，若手の教員が増え，後輩にアドバイスをしたり，少なからず頼られたりすることが多くなってきました。本研修は，まだまだ力量不足の私にとって，指導力向上を図る上で有意義な研修となりました。

研修では，「生徒指導の機能を生かした学級（集団）づくり」や，現代社会を生き抜く児童の育成を目指した「グローバル人材の育成」，「自ら学び，思考し，表現する力の育成と言語活動の充実」，「健やかな体の育成とキャリア教育」，「教員としての倫理観の高揚」などの内容について講師の先生方から教えていただきました。また，課題探求研修では，これまでの教育実践を振り返り，課題となることを把握し，研修者同士で協議しながら課題に対する様々な視点を共有したり，自己の課題に対する考えを深めたりすることができました。さらに，研修者同士で意見や考えを交流し合う中で，お互い刺激し合い，励まし合いながら教育者としての自覚を深めることができたとともに，他校の教育実践法や学級経営における効果的な指導法について学ぶことができました。

研修をとおして，講師の先生方や同期の仲間からたくさんのことを学ぶことができました。そして，これまでの教育実践を振り返るよい機会となり，今後の道筋を思い描くことができました。「教師は授業で勝負」という言葉があるように，「子どもが夢中になれる教材とは何か。」「どのような授業展開で，どのように発問したら子どもは夢中になれるのか。」を常に考え，構想を練りながら日々の学習指導を進めていきたいと思います。そこから子どもたちの「できた」「わかった」「なるほど」の声をたくさん増やし，未来に生きる力を育んでいくのが，教師としての大きな使命であるとともに，教師にとっても大きな喜びであると考えます。また，日々の学校生活を送る上で，同僚と情報交換をし，共に悩み，共に考え，よりよい方向へと導いていけるよう，中堅教員としての自覚をもって過ごしていきたいと思います。

ステップアップ研修を終えて

白子町立関小学校
教諭　麻生　雄久

教員となり７年間が経とうとしています。まだまだわからないことはたくさんありますが，これまで様々な経験をさせていただいてきたおかげで，少しずつ自信をもって指導することができるようになってきました。

ステップアップ研修では，７年目教員としての勤務校での役割や社会人としてのマナー，指導方法など幅広く指導していただきました。指導方法の中で，ことばの教室の役割や発音の指導方法を体験しながら指導していただきました。ことばの教室について理解できていなかったことが多くあり，学級での声かけの仕方について詳しく学ぶことができました。また，家庭や地域社会と連携していくために，学校での取組を様々な方法で発信していくことが必要だと学ぶことができました。

班別協議では，同期の先生方と各自の実践内容についての発表を行いました。各教科や特別支援教育など様々な分野で意見を交換しましたが，どの先生方も自分の考えをしっかりともち，課題を解決しようと具体的な方法を考え，改善していくような素晴らしい発表で，自らの実践に生かしていきたいと思いました。

私はICT機器を効果的に使い，わかりやすく算数科の指導ができるようになることを課題としました。いろいろなICT機器の使い方を学び，どのように学習に取り入れるのか，多くの先生方の授業を参観させていただきました。その中でも，導入で楽しく学習課題を理解できるように活用していたり，自力解決後にノートをテレビに映し出し，全員での話し合いに活用していたりすることが効果的だと思い，自分でも実践していきました。実践していく中で，ICT機器を使うことで児童の意欲を高めることができると感じました。「問題を解きたい」という気持ちをもたせ，自力解決に集中して取り組ませることができたと思っています。これからも効果的な使い方を学び，算数科以外でも活用していきたいと思いました。

研修会の最後に「これから数年後に各学校の中核を担う教員であるミドルリーダーになることが求められる。」と話をいただきました。自分の役割を果たすことで精一杯ですが，これからも新しいことを学ぶ姿勢を忘れず，後輩が困っていたら手本を見せたり，適切な助言をしたりすることができる教員を目指していきたいと思います。

各種研修を終えて

中堅教諭等資質向上研修を終えて

長柄町立日吉小学校
教諭　野館　由紀子

教員となり１１年目を迎えて，中堅教諭等資質向上研修に参加させていただきました。

研修では，自分自身の教師力の向上に加えて，学校運営に関わる力の向上が求められていることを痛感しました。これまでのように，仕事に追われ，誰かが引いたレールの上を歩くのではなく，自ら先を見通して行動し，率先して発言する姿勢が重要だと感じました。そして，ベテランの先生方の技術を継承し，後輩へ受け継ぐ役割を担うことが期待されています。１０年という年月は，それだけの重みがあるのだと改めて考えさせられました。

また，新学習指導要領が実施される直前であることから，重点である主体的・対話的で深い学び，道徳の教科化や外国語教育の充実，情報活用能力の育成などについて，個人で，さらに仲間と意見を交わし，時間をかけて向き合いました。教育について自分の考えをしっかりもちながらも，相手の意見に耳を傾けることで，新しい展開が見えてくることも多々ありました。この経験により，子どもたちにつけたい力の一つとして挙げられている「多面的なものの見方」が出来ることの大切さを実感することになりました。

校外研修の一環で取り組んだ体験研修では，公立の図書館で業務の一部を体験させていただきました。そこでは，公立図書館の意義を踏まえ，地域性や利用者の要望などを取り入れ，司書の思いも交えた運営がなされていました。機械化されていることも多くありましたが，サービス業という役割も重要視されていました。２日間という短い期間ではありましたが，学校以外の仕事を垣間見ることができ，大変貴重な経験でした。

社会の急激な変化の中で，児童が大人になる頃には，いくつもの職業がロボットで代用できるようになり，労働の質が大きく変わると言われています。子どもたちには，ロボットを作る側であり，相手の思いをくみ取り配慮する心をもつことが今後は求められるということを伝えていきます。

自分自身が向上する気持ちを持ち続け，社会に求められる，自分の足でしっかり立って歩くことができる人を育てる教師でありたいと思います。

スクールリーダー研修１年目を終えて

一宮町立一宮中学校
教諭　茂住　卓生

自分にはリーダーの素質はない。私はそう思っている。それは，自分を人見知りだと思っているからである。人前に立って何かをすることは，小さい頃から苦手だった。そんな私が教員を目指したのは中学校や高等学校の時の恩師に憧れ，目標としたからである。目指したところで，素は変わらない。教員となり，常に目標となる先輩が身近にいて，いろいろなことをまね，学ぶことができた。若くしてリーダーとしての役割を与えられ，うまくいかないことを自分の経験の無さだと悩んでいた先輩。私とは正反対のような，常に皆の前に立ち，周りを引っ張っていく先輩。何となく頼りなく見えるが，着実に指導を進めていく先輩。このような様々な先輩のおかげで何とか教員としてやってこられたと思っている。

１０年経験者研修の際，講師の先生からは，毎回のように中堅層として学校を引っ張っていくことの必要性についてお聞きしたように思う。そのころから，スクールリーダーということを考え始めてきたが，なかなか難しい。リーダーの素質がない分，リーダーとしての役割を果たしていくには，学ぶべきことがたくさんある。そして，今年度からスクールリーダー養成研修で学ぶ機会をいただいた。

この研修では，現代の教育課題から始まり，特別支援教育，生徒指導，文書の取り扱い，道徳教育，モラールアップ，授業研究，長欠解消，授業力向上と私たち教員にとって大切な内容の講義を受けることができた。なかでも，授業研究では，他教科の授業を参観させていただき，教科の違いによる授業経営の違いと共通点を学ぶことができた。授業を実施していただいた先生に感謝したい。また，なかなか普段の仕事の中では，経験のない事柄もあり，これからリーダーとして視野を広げていくために学ぶべきことが明確になった。現在はちょうど学習指導要領の改訂期にあたり，改訂や移行に伴う講義もあった。その面でも学校をリードしていく必要があると強く感じた。

この研修は２年間の計画であり，研修もまだ道半ばである。来年度の研修をとおして，さらにリーダーとしての役割を学び，学校を引っ張っていく存在になれるように，努力していきたい。

教育功労表彰

掲載順につきましては，順不同とさせていただきます。
（敬称略）

○長生地区市町村教育委員会連絡協議会表彰

茂原市立茂原中学校	校長	山田　育雄
茂原市立早野中学校	校長	若菜　功
茂原市立豊田小学校	校長	酒井　靖
茂原市立鶴枝小学校	校長	小幡　亮二
一宮町立東浪見小学校	校長	唐鎌　弥生
白子町立白潟小学校	校長	大場　英昭
白子町立関小学校	校長	鈴木　輝夫
長柄町立長柄小学校	校長	白石　延弘
長南町立長南中学校	校長	蒔田　民之
長南町立長南小学校	校長	酒井　政則

○睦沢町教育委員会教育功労表彰

睦沢町立睦沢中学校	教諭	宮本　博匡
睦沢町立瑞沢小学校	教諭	小茂田浩子

○長南町教育委員会教育功労表彰

長南町立長南小学校	教諭	河野　正喜
長南町立長南小学校	教諭	吉野　幸子

○文部科学大臣優秀教職員表彰

〈一　学習指導　の部〉

茂原市立冨士見中学校	主幹教諭	佐藤　千秋
茂原市立豊田小学校	教諭	木島　千景